東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

IBの取り組み その1：ライティングの実践

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林,万純, 小松,万姫, スミス,ベン, 手塚,史子, 前田,健士 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173826

国際中等教育研究　第15号 p.145 ～ 152
東京学芸大学附属国際中等教育学校研究紀要

IB の取り組み　その１

―ライティングの実践―

An Approach to IB　Part 1

–Writing practices–

外国語科　小林 万純
小松 万姫
スミス ベン
手塚 史子
前田 健士

１章　はじめに

IB 教育におけるライティングの評価と実践

本校は開校時より国際バカロレア（International Baccalaureate, IB）の中等教育課程 MYP（Middle Years Programme）と高校のディプロマ課程（Diploma Programme）を実践している。ライティングは Productive skill の一つとして　今年度から MYP のガイドの改正が行われた。ライティングは三つのスキル、受動的なスキル、アウトプットのスキル、そしてやり取りする機能のうちのアウトプットのスキルとしてとらえている。そしてライティングの目標としては「目的をもって一定量を書くこと、そしてナレーション、比較、説明、説得、正当化、評価といったコミュニケーションニーズにこたえる。そしてそうすることによって対象、目的、意味、文脈といった概念の理解を促すことを目指している。

今回 2021 年度の MYP のガイド改訂により、「言語の活用」でスピーキングとライティング両方が評価されていたのが「ライティング」という独立した観点がこれにより、ライティングというスキルがよりクローズアップされることになった。

ライティングがどのような観点で評価されているのか、以前のものと現行のものを比較した。

まず多様な単語の使用と文法表現がそれぞれ別の項目として評価されることになった。また受け手と目的に沿っているかということが明示的に評価対象になった。更に以前の「話された、書かれた、もしくは視覚的なテキストに反応してコミュニケーションする」という観点では幅広いアイディア、意見、そして気持ちを効果的に表現することが求められていたが、そのストランドは今回の改訂ではなくなった。

このような改訂を受けて、外国語科では年度初めに各学年で行っているライティング活動を見直し、6 か年にわたって段階を追って力をつけていくようなカリキュラムをデザインした。

本校では大きく分けて英語圏での教育を受けたアドバンストのクラスと、国内で教育を受けた生徒たち向けのクラスを展開している。アドバンストは基本的に英語圏でのレベルに対応した授業を展開する。コアのライティングは身近な話題を題材にした日記やジャーナルの作成、dictogloss から始まり、次第に社会的な事象や抽象的な物事を論理的に書く力を養う。また書くテキストの種類もエッセイから新聞記事、ブログなど、社会生活に則した多様なものを扱う。今回はその実践の一端を紹介する。

２章　本校におけるライティングの実践

１節　１年英語（Core クラス）　担当：手塚 史子

１年生の Writing 指導に当たっては、語彙の不足とスペル定着の不足から、単語テストや簡単な英作文テスト以外の評価活動が難しく、生徒にとってもハードルが高いという課題がある。日記の作成など、Fluency に重きをおいて「生徒に書く楽しみを味わってもらう」という効果的方法もあるが、コロナ禍のオンライン授業等できめ細やかなフィードバックが難しく、生徒が自分の力で着実に取り組み、力の伸長を実感できる機会を提供することに限界を感じていた。また、日記の継続は英語に苦手意識のある生徒にとって１年生段階では敷居が高く、モチベーション維持や、取り組みの継続が難しいといった課題もあった。

そこで、今年度は How can we share the information effectively? という問いのもと、積極的に dictogloss を取り入れ、生徒の既習事項を生かしながら、定型表現から自己表現へと幅を広げる活動に力を入れた。dictogloss では、テキストで扱った文章を音声で１度聞き、各自メモをとってキーワードを拾ったのちに、要約文を再構築するという手順を追った。指導にあたっては、以下の段階的な指導を行った。

１．単語の意味やスペルの定着
２．ストーリーの内容把握
３．音読練習にて音と文字の完全一致
４．５W1H に焦点を置いた要約文作成の指導と様々な接続詞の input

文章作成にあたっては以下に挙げる２つのレベルを設定し、生徒自身が目標設定を行った。

Level 1　キーワードを正確に拾って選択し、起承転結にしたがって内容を再構築する
Level 2　接続詞の活用やパラフレーズを意識して、自分の言葉で再構築する

約半数の生徒が Level 1 を選択し、「自分で文章を書くのが難しくても覚えてできる部分が十分にあると分かり、勉強しやすかった、自信がついた」との好意的な反応が得られた。

また、教材や表現の幅に一定のコントロールがかかっているため、教師側の利点として、生徒に共通するスペルミスや文章構造のミスを分析しやすく、生徒に多くの学びあいの機会を与え、具体的なフィードバックを与えやすいといった点があった。

Level 2 を選択した生徒に関しては、Narrative 特有の One day...という表現を取り入れたり、様々な接続詞（while, although, in addition, moreover, therefore, all in all,　など）をリストから活用してみるといった前向きな試みが見られた。生徒は、単語選択や言い換え表現、展開の説明に頭を悩ませていたが、向上心のある生徒はその難しさを楽しんでいる様子だった。また、図１の生徒の取り組みに見られるよう、メモの形式については日本語・英語・図などいずれも可とし note-taking skill の実践の場ともなった。これは IB のコンセプトである Word Choice, Message, Structure につながるものである。

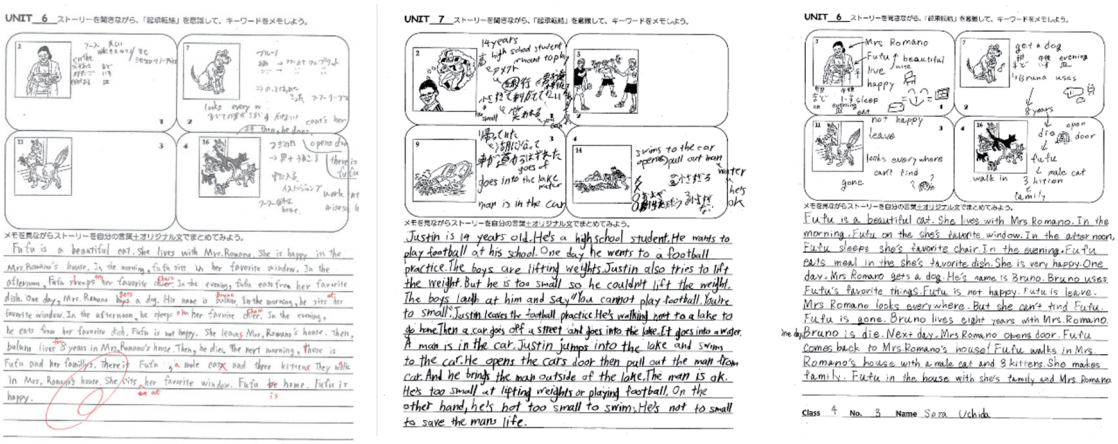


図１　１年生 dictogloss

２節　２年英語（Core クラス）　担当：手塚 史子

２年生 Core クラスは、How do we design our communication? を問いとして、１学期には毎週１ページのフリージャーナルを書いてもらい、２学期にはパラグラフライティング・絵にセリフを入れる形の要約と、２種類の活動を行った。

【１学期フリージャーナル】

生徒は１ページから２ページを目安に、好きな映画や気になる時事問題、趣味や週末の思い出など、好きなトピックで英語ジャーナルを毎週書き、教員からフィードバック（文法や語彙の修正・アドバイスとコメント）をもらうことを継続した。２年生になると語彙も増え、基礎文法も定着していることから、前向きな取り組みが見られ、各々のテーマやレイアウトを楽しんでいるようだった。文法に関しては、細かな修正をいれたものの、間違いの訂正以上に、類似語の紹介や少し難しめの表現を数多く追記することで生徒のモチベーションアップを狙った。

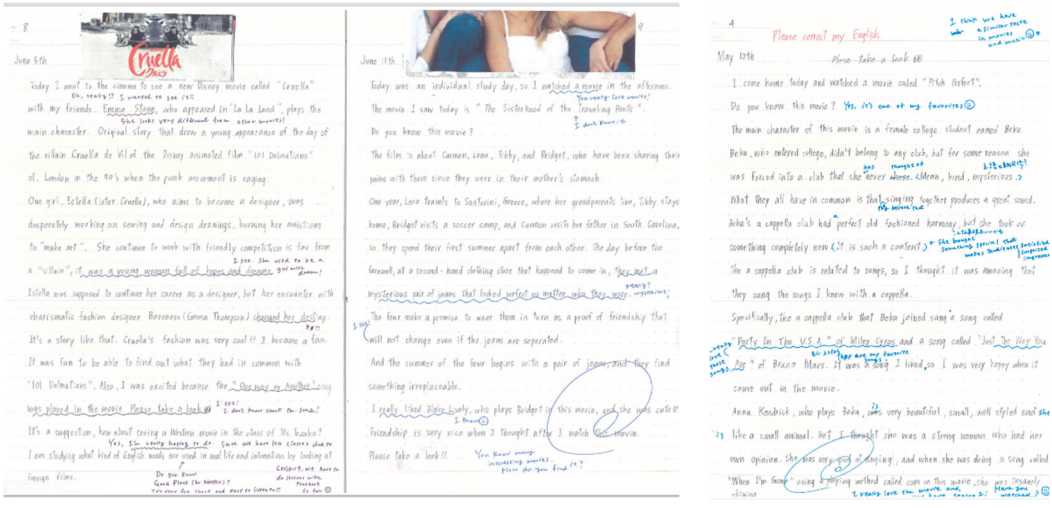


図２　２年生フリージャーナル

【２学期パラグラフライティング】

２学期になってからは、与えられたトピックに関しての賛否を５パラグラフエッセーで書く練習

を行った。段落構成には“You may say … but I think that .....”のような反駁を含むような指導を行い、mini-debate や批判的思考の伸長にもつながった。

また、２学期の後半からは、授業で扱ったストーリーの絵にセリフをいれ、漫画風の要約を作成する活動を試みた。これは後に３年時に導入する Reading Log の初歩段階として取り入れたもので、場面設定や月日の流れを意識してコマに書き足したり、３人称で進むストーリーを１人称に置き換えて、主人公のセリフや気持ちを自分の言葉で追記してもらった。活動を通しての利点としては、以下の２点が挙げられる。

①文章を１人称のセリフに落とし込むことで、文法事項が簡易になり、英語が苦手な生徒でも取り組みやすかった

②言葉を自由に付け足したり、表現にオリジナリティの幅ができたことで相手に伝わる語彙選択や表現選択を生徒が主体的に考えることができた

生徒の作品を見比べると、同じ物語であっても発信する際の言葉選びや場面設定の説明がそれぞれ異なり、それらを比較することで、IB の教科コンセプトである Purpose, Word Choice, Structure について知見を深めるいい機会になった。また、３年生で本格的に取り組む Reading Log につながる橋渡しとなった。

図３　要約としてのコマ作成

月日の経過や場面設定などを示している

３節　３年英語（Advanced クラス）　担当：ベン スミス

The large portion of the writing assignments were given by Mr. Paterson who tasked the students with writing regular blog posts which he checked and graded.

For my part, the students took regular vocabulary tests as they worked through a book titled Painless Vocabulary. They also wrote multiple short essays in response to readings from novels (from The Chronicles of Narnia) which we read in class. During the latter part of second term, we studied Erik Erikson's theory of the stages of psychosocial development and the students wrote a series of essays in response to questions on the stage of adolescence.

With all the essays assigned, the students received the questions several days in advance and were given significant time in class during which they could discuss their thoughts with classmates as well as me, and take notes which they were allowed to refer to while writing their essays. The intent of

this was to give them a chance to deepen their thoughts and self-awareness through guidance, interaction, and reflection over a longer period of time as they contemplated weighty questions.

Sample questions on Adolescence:

1. Peers
   - Whose opinions of you do you care about?
   - How do you seek their approval and connection?
   - What do you want from your friends? What do you want to offer them?
   - How do you want your social circle to look like?
2. Role Models
   - Who are your role models (from fiction, history, or personal connections)?
   - What do you admire about them?
   - In what ways do you want to become like them?

４節　４年英語（Basic クラス）ジャーナルについて　担当：小林 万純

本校では大まかな流れとして、以下のようにライティングをレベルアップしていく。

・１年：文からパラグラフへ。要約と簡単な自己表現。
・２年：日々起きたことや考えた日記として１回で A4 程度書く。
・３年：テーマや時事的な内容に関して意見をエッセイとして述べる。
・４年：高度な英語を使用して、より正確に、具体例を述べながら探究した内容を記述。読み手の意識で導入のフックなどに気をつけて発信していく。探究の問いに答える。

これらの力をつけていくために継続して行われているのが Journal Entry だ。前期課程では量のアウトプットとそれを読者に伝える喜びを感じられるのが１番の目的である。そこから後期課程になった際に、どのように生徒はレベルアップしていけるのだろうか。

【実施方法】

まず、前期課程では１学期に 10 ページ程度、定期的に Journal の提出を行う。２回のみ添削を受け、その他はコメントのみで返す。生徒はスケジュールをしっかりと組み立てて、定期的に教師に提出しなければならない。３年次でもペースとスタイルは同じだが、内容をレベルアップした。

そして後期課程になり、伝える喜びだけでなく、言語そのものが正確で高度であることが目的となってくる。その際に複雑な中身の伝達が重要であり、探究をより一層意識しながら表現できる力を身につけなくてはいけない。

よって、各 Lesson で扱う内容の探究テーマと探究の問いを題材にし、以下のルールで定期的に提出することとした。

・各 Lesson １つ以上の探究に関する Question を選び、１つ１つエッセイで考えを述べる
・添削を受ける場合は添削期限までに提出すること
・Introduction, Body, Conclusion のスタイルで書くこと
・辞書や参考書などで学んだ高度な英語を必ず活用すること
・学期末に Journal ノート提出
・評価課題は授業内で実施のエッセイテスト

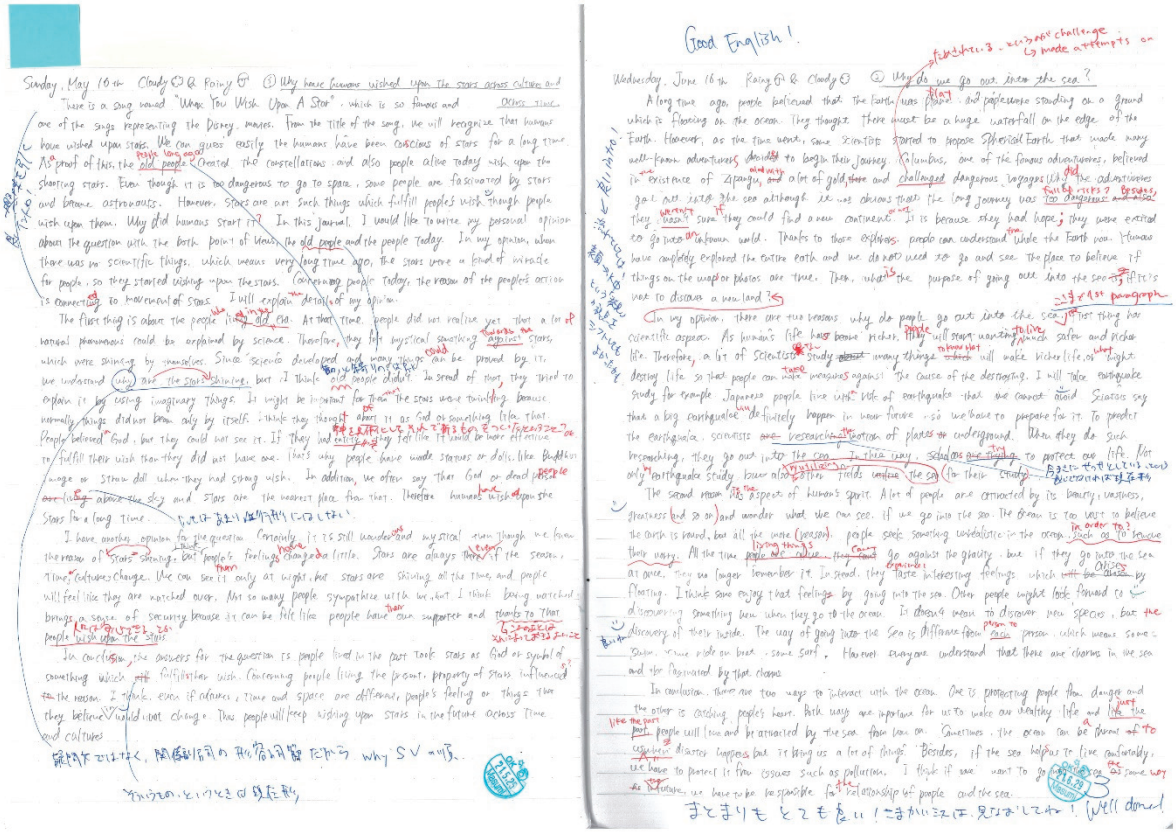


図４　４年 Basic の生徒　Journal Entry の例

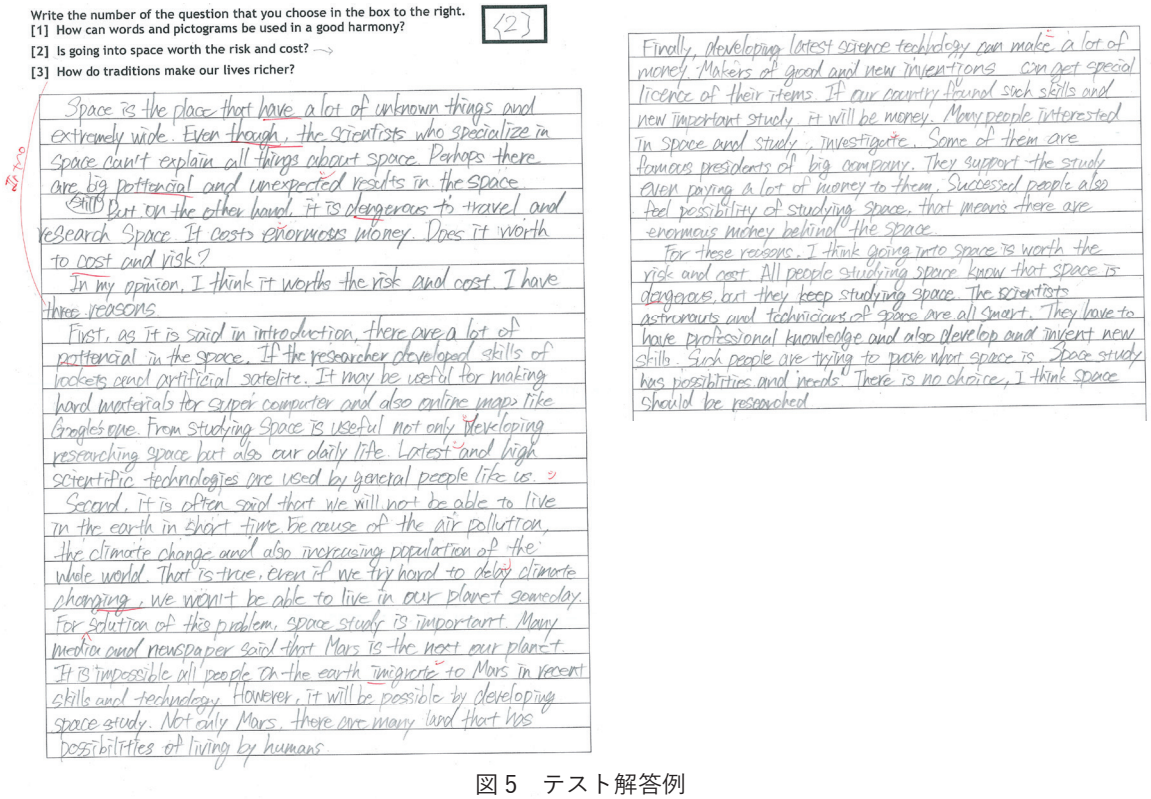
【足場かけ Scaffolding】

・形成的なフィードバックを定期的に行う：教師が文書に直接添削・コメントすることで文法的な視点と内容構成上の視点からアドバイスを行った。また、それをクラス全体に共有した。

・エッセイライティングの練習：本 Writing Academic English (Oshima and Hogue)を活用し、エッセイでの導入の種類を提示し、どのような方法で読み手の興味をフックできるか、ワークシートで練習した。(例：Funnel introduction, Attention-Getting Introduction〔Dramatic story, surprising facts, historical background, etc.〕)

【総括的評価】

探究の問いを何度も学期中に練習し、形成的評価を含めた足場かけも行っているので、学期末にはどのように書いたら良いかの正解が見えている段階である。英語の表現も多様で高度なものを身につけている。よって、総括的評価は授業内 40 分で探究の問いについてエッセイを書くというものである。探究の問いは全てのレッスンから３つを教師が選択し、生徒はそれから１つを選択する。ジャーナルの持ち込みは不可。学期中に学んだことが身につき、テストで発揮できなければ意味がない。それは、内容についても言語力についても同じことが言える。



Write the number of the question that you choose in the box to the right. {2}

[1] How can words and pictograms be used in a good harmony?

[2] Is going into space worth the risk and cost?

[3] How do traditions make our lives richer?

Space is the place that have a lot of unknown things and extremely wide. Even though, the scientists who specialize in space can't explain all things about space. Perhaps there are big potencial and unexpected results in the space.

But on the other hand, it is dangerous to travel and research space. It costs enormous money. Does it worth to cost and risk?

In my opinion, I think it worths the risk and cost. I have three reasons.

First, as it is said in introduction, there are a lot of potencial in the space. If the researcher developed skills of rockets and artificial satelite. It may be useful for making hard materials for super computer and also online maps like Googles'one. From studying space is useful not only developing researching space but also our daily life. Latest and high scientific technologies are used by general people like us.

Second, it is often said that we will not be able to live in the earth in short time because of the air pollution, the climate change and also increasing population of the whole world. That is true, even if we try hard to delay climate changing, we won't be able to live in our planet someday. For solution of this problem, space study is important. Many media and newspaper said that Mars is the next our planet. It is impossible all people on the earth imigrate to Mars in recent skills and technology. However, it will be possible by developing space study. Not only Mars, there are many land that has possibilities of living by humans.

Finally, developing latest science technology can make a lot of money. Makers of good and new inventions can get special licence of their items. If our country found such skills and new important study, it will be money. Many people interested in space and study, investigate. Some of them are famous presidents of big company. They support the study even paying a lot of money to them. Successed people also feel possibility of studying space, that means there are enormous money behind the space.

For these reasons, I think going into space is worth the risk and cost. All people studying space know that space is dangerous, but they keep studying space. The scientists astronauts and technicians of space are all smart. They have to have professional knowledge and also develop and invent new skills. Such people are trying to prove what space is. Space study has possibilities and needs. There is no choice, I think space should be researched.

図５　テスト解答例

よって、頭の中から紡ぎ出した言葉を使用してエッセイを作成する必要がある。分量はＡ４一枚以上を書くことが必要。ルーブリックに基づいて、「語彙」、「文法的構造」、「情報の整理、接続表現」、「文脈、受け手と目的」の４つのストランドから８段階で評価される。特に後半二つに関しては、エッセイのうち導入の部分を重視すると細かくタスクについての説明を載せている。

生徒たちはそれらを意識し、それぞれの準備した内容を基に、根拠に基づいた多様な意見を高度な英語で述べることに成功した。前期課程から継続してアウトプットする習慣がついているので、抵抗なくアウトプットができる前提で、さらにステップアップを目指せる。しかし、課題としては、細かい文法の修正ができなかったりとっさに高度な語彙・文を使えたりできない場合もあることだ。

今後も生徒の成果や課題を基に、タスクをブラッシュアップさせていきたい。

５節　５年 DP English B　HL　担当：小松 万姫

ディプロマクラスの英語Ｂでは社会で活用される主なテクスト（文章）を理解し、書くことができることを目指す。最終試験のライティングの課題は設定された目的、受け手、状況などにふさわしい文章を書くというものである。その課題に対応し、さらに生徒たちが将来的に社会生活で英語を活用できるようにするために、授業ではあらゆるテキストを読み、それらのテキストがどのような目的で、だれに向かって（受け手）どのような状況のなかで書かれたものかを分析する。また生徒はそういう目的や受け手、そして状況を自ら設定し、文章を書く、という練習も繰り返していく。次に論理的な文章を書くための流れを把握したあと、文章の大まかな構造を作っていく、という活動をする。グループで一つの文章を書いていく、という作業を行うことによって、他の生徒から文章や論の運び方のバリエーションを学ぶのである。

６節　６年英語表現Ⅱ　担当：前田 健士

本校６年次に開講される「英語表現Ⅱ」で、筆者が担当しているクラスは、教科書「CROWN English Expression Ⅱ New Edition」（三省堂）を基本とした「基礎文法・英作文」を目標に設定したクラスで、生徒自身が各自の目標や進路に合わせてクラス選択をしている。

６年次の教科書基礎クラスでは大学入試対策も目標の一つであり、教科書の文法問題や短文の英文和訳に取り組むことで、英語の Accuracy の面を扱うことが多い。本クラスでは英語の Fluency の面を補完し評価するために、以下の“Writing Marathon”の活動に取り組んだ。

教科書の各レッスン最後に課されているライティング活動“Let's Try”のテーマを発展させ、生徒自身の関心ごとや社会問題に対する意見など多岐にわたるエッセイを書く。字数は大学入試の自由英作文程度の 80～100 字とし、１・２学期で計 12～15 回の提出を課す。授業内では、ペアまたはグループでアイディアや意見を共有しながら“Introduction” “Body 1” “Body 2” “Conclusion”のフォーマットに情報を整理しエッセイにまとめる。「表現・意見」「語い・文法」「構成」のストランドで構成されるルーブリックに従い４段階で評価する。

教科書を使用した基礎クラスの生徒は、Accuracy が求められる大学入試問題に苦戦する一方、教科書から発展させたトピックに対して、限られた語数でエッセイにまとめる力は、６年間体系的にライティング・スキルを学び、獲得した成果だと言える。

３章　おわりに

以上外国語科の６年間を通したライティングの実践を紹介した。年度を通してライティングの指導で一貫しているのは dictogloss やジャーナルなど、小さなステップ（scaffolding）を踏んで継続的に活動を行っていることである。このようなきめ細かな毎日の実践の積み重ねがライティング力の向上につながると考えることができる。

参考文献

Oshima, Alice, and Ann Hogue. *Writing Academic English.* 4th ed, Pearson/Longman, 2006.

An Approach to IB　Part 1

– Writing Practices –

Abstract

This annual report of the Foreign Language Department focuses on how writing skills are developed across the continuum of 6 years. The increasing emphasis on skills in the IB- MYP language acquisition is seen in the recent renewal of the criteria which specifies the expectation of writing for each level of proficiency. The emerging learners start with writing simple diaries and journals on every-day topics and eventually the proficient learners will write logically coherent writings on social issues and abstract topics in various text types.